

# ヨハネの手紙第一

## 序論(1:1-4)

### §1 キリストのメッセージの本質(1:5-2:2)

## はじめに

### 1. 手紙の著者

- (1) 3つのヨハネの手紙の中には、著者の名前は出てこない。
- (2) 手紙の著者はイエスの目撃者であり(1:1)、かつ権威を持って語っている(2:8)。また、手紙は内容や文体がヨハネの福音書と非常に似ている。そして、使徒ヨハネの孫弟子である紀元2世紀の神学者エイレナイオスは、この手紙が使徒ヨハネによるものであると言っている(エイレナイオス『異端反駁』3.1.1; 3.16.5; 3.16.8)。
- (3) したがって、著者は使徒ヨハネだと言っていいたいだろう。

### 2. 手紙の背景

- (1) 書かれた時期は(おそらく)紀元70~90年代のどこか。
- (2) 伝承によれば、エペソで書かれたと言われている。
- (3) ヨハネは、誤った異端の教えによる分裂という問題の中にある信者たちを励ますために、この手紙を書いたものと考えられる(2:18-22参照)。

### 3. 手紙のテーマ

- (1) ヨハネは、救いの確信を教えることによって信者たちを励まそうとしている。
- (2) 救いの確信は、次の3つの検証<sup>1</sup>によって教えられている。
  - ① **神学的検証**: イエスを「神の子」であり、「人となって来た」キリストであると信じているかどうか。
  - ② **道徳的検証**: 神の命令を守り、義の道を歩んでいるかどうか。
  - ③ **社会的検証**: 兄弟姉妹同士の交わりを持ち、互いに愛し合っているかどうか。

### 4. 手紙を学ぶ意味

- (1) これは、イエスから使徒たちを通じて受け取った教えを確認させる手紙である。
- (2) これは、兄弟姉妹同士の交わりの中から愛の実践が始まることを教えている手紙である。

---

<sup>1</sup> Robert Law, *The Tests of Life: A Study of the First Epistle of St. John* (Edinburgh: T. & T. Clark, 1909), pp. 5-6; ジョン・R・W・ストット『ティンデル聖書注解 ヨハネの手紙』千田俊昭訳(いのちのことば社、2007年)59-60頁; Ronald Sauer, "1 John," *The Moody Bible Commentary*, Michael Rydelnik and Michael Vanlaningham, eds. (Chicago, IL: Moody Publishers, 2014), pp. 1974-75.

## 序論(1:1-4)

1:1 初めからあったもの、私たちが聞いたもの、目で見えたもの、じっと見、また手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて、

1. 1:1-4の主な意味は、「いのちのことばについて、……あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。……私たちがこれらのことを書き送るのは、私たちの喜びが全きものとなるためです」ということである。
2. この手紙でヨハネが扱おうとしているテーマは「いのちのことば」である。
  - (1) ヨハネの福音書 1:1「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった」と似ている。
  - (2) 福音書の「ことば」は、イエス・キリストのことである（ヨハ 1:14 参照）。
  - (3) 手紙の「いのちのことば」の中には、次の2つの意味が含まれている。
    - ・ イエスご自身
    - ・ イエスのことば（メッセージ）＝福音のメッセージ
  - (4) このような言葉の捉え方は、ユダヤ的な思考の特徴である。

（例）神は厳しい方であり、慈しみ深い方である
3. 「初めからあったもの」
  - (1) ヨハネの福音書 1:1の「初めに、ことばがあった」は、イエスが創造の御業の前からおられた神であることを教えている。
  - (2) ここでも、ヨハネは「いのちのことば」が「初めからあった」と教えている。
    - ・ イエスは、創造の前からおられた方である。
    - ・ 福音のメッセージは、創造の前からイエスが持っておられたメッセージである。
4. 「私たちが聞いたもの、目で見えたもの、じっと見、また手でさわったもの」
  - (1) 「私たち」とは、ヨハネを含む使徒たちのことである。
  - (2) 「聞いたもの」～「じっと見、また手でさわったもの」と、後になるにつれて具体的になっている。
  - (3) 特に最後の「じっと見、また手でさわった」が非常に具体的である。
    - ・ 「じっと見」には、近くで見て、じっと観察したという意味合いがある。
    - ・ 「手でさわった」は、手に取って触れるという意味合いがある。また、イエスが同じギリシャ語の動詞を使い、復活された後にもご自分が肉や骨を持っていることを示された（ルカ 24:39）。
  - (4) 「初めからおられ」た神ご自身が、肉や骨を持つ人間となり、私たちの世に来られた。

ヨハネはこのことを、具体的な表現を使ってヨハネの福音書 1:1 よりも強調している。

- (5) また、異端の人々は、キリストが人間でもあったということを否定していた。それに対して、ヨハネはキリストご自身を「聞き、見、じっと見、手でさわった」本人として、神が人として来られたという真理を強調しているのである。

1:2 このいのちが現れ、私たちはそれを見たので、そのあかしをし、あなたがたにこの永遠のいのちを伝えます。すなわち、御父とともにあって、私たちに現された永遠のいのちです。

1. ヨハネは、「このいのちが現れ」たのを「見た」。
  - (1) ここでの「見た」で使われているギリシャ語の動詞は、1節の「(目で) 見た」で使われていたものと同じである。
  - (2) ヨハネはもう一度、自分たちが「人となって来られた子なる神」の目撃者であることを強調している。
2. ユダヤ人である使徒たちは、メシアが来ることを心から待ち望んでいた。
  - (1) 彼らにとって、「いのち」であるメシアが実際に来たということは、衝撃的だった。
  - (2) また、それを間近で目の当たりにできたということは、さらに衝撃的だった。
  - (3) だからこそ、ヨハネは「いのち」について証をし、伝えざるを得なかった。
3. ヨハネは「いのち」について証をし、読者に「永遠のいのち」を伝えようとしている。
4. 「永遠のいのち」とは、「御父とともにあって、私たちに現された永遠のいのち」である。
  - (1) またしてもヨハネは、父なる神とともにおられた子なる神が、人となって現れたことを強調している。
  - (2) ここでの「永遠のいのち」は、イエスご自身を指している。  
しかし、ヨハネがここで伝える「永遠のいのち」を信じて受け入れた者は、自ら「永遠のいのち」を持つようになる。
  - (3) それは、イエスご自身に「いのち」があるからである（ヨハ 1:4「この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。」）。
  - (4) また、「永遠のいのちとは、……唯一まことの神である [御父] と、[御父] の遣わされたイエス・キリストとを知ること」だからである（ヨハ 17:3）。

1:3 私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。

1. ヨハネが「いのちのこぼ」を伝える第1の目的は、「あなたがた [読者] も私たち [使

徒たち]と交わりを持つようになるため」である。

2. 使徒たちの交わりは、「御父および御子イエス・キリストとの交わり」である。
  - (1) イエスは父とひとつである（ヨハ 14:8、9）。
  - (2) イエスと交わりを持っていた使徒たちは、御父とも交わりを持っていた。
3. 信者もまた、イエスと父とひとつである聖霊によって、「御父および御子イエス・キリストとの交わり」に入れられる。
  - (1) クリスチャンは信じたことで聖霊をいただいている（Iヨハ 5:13；Iコリ 12:13；エペ 1:13）。
  - (2) 私たちの内におられる聖霊と交わりを持つとき、三位一体の神との交わりに入れられる。
4. 聖霊を持った兄弟姉妹同士の交わりもまた、「御父および御子イエス・キリストとの交わり」である。
  - (1) 愛である神ご自身が内におられるから、信者は愛を知り、愛を実践することができる（Iヨハ 4:12-19）。
  - (2) 愛に根差したクリスチャン同士の交わり自体が、神との交わりにもなる。
5. ヨハネが手紙を通して伝えている「いのちのことば」を受け取って信じることは、神の愛に根差した交わりをクリスチャンにもたらすはずである。

#### 1:4 私たちがこれらのことを書き送るのは、私たちの喜びが全きものとなるためです。

1. ヨハネが「いのちのことば」を伝える第2の目的は、「私たちの喜びが全きものとなるため」である。
2. 「私たちの喜び」について
  - (1) New Revised Standard Version (NRSV) の注  
「他の古代の権威ある写本の中には、『あなたがたの』と読むものがある。」
  - (2) 3節でヨハネが「私たち」と「あなたがた」を比べていることから、「あなたがたの喜び」の方が正しいのではないかと考える学者もいる。
  - (3) 「私たちの喜び」なら、読者が使徒たちと交わりを持ち、御父および御子イエス・キリストとの交わりに入れられることで、使徒たちの喜びが「全きものとなる」という意味になる。
  - (4) 「あなたがたの喜び」なら、読者たちが交わりに入れられることで、読者たちの喜びが「全きものとなる」という意味になる。
  - (5) New English Bible (NEB) の訳

私たちがこれを書くのは私たちみんなの喜びが全きものとなるためである。

3. 「いのちの**ことば**」を受け取った信者同士が神の交わりに導かれるなら、使徒たちも含めて「みんなの喜びが全きものとなる」。
4. クリスマスが持つ喜びは、神の愛に根差した信者同士の交わりである。

## §1 キリストのメッセージの本質(1:5-2:2)

### 1. キリストのメッセージの要約(1:5)

1:5 **神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない。これが、私たちがキリストから聞いて、あなたがたに伝える知らせです。**

1. 使徒たちがキリストから聞いたメッセージの要約は「**神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない**」である。
  - (1) 「**神は光である**」。将来実現する新しい天と新しい地では、神ご自身が都を照らす光となられる（黙 21:23 ; 22:25）。
  - (2) 「**神は光である**」は、神が聖い方だということである（Iテモ 6:16）。
  - (3) 「**神は光である**」は、神が救いの希望の光だということである（詩 27:1 ; ヨハ 1:9）。
  - (4) 「**神は光である**」は、神が信者を道徳的に導く光だということである（詩 119:105）。イエスご自身は、彼に従う者を世において義の道へ導き、その道を照らす「光」である（ヨハ 8:12 ; 12:35）。
2. 神はそのようなお方であるから、神の内には「**暗いところ**」また「**闇**」（新共同訳）が全くない（神には罪が全くない、と言い換えてもいいだろう）。

### 2. 闇の中を歩みつつ神との交わりを保つことはできない(1:6-7)

1:6 **もし私たちが、神と交わりがあると言っていながら、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであって、真理を行ってはいません。**

1:7 **しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。**

1. 「**光**」と「**やみ**」が比べられている。
  - (1) ヨハネの福音書 1:5 では、「**光**」と「**やみ**」は対立している。

- (2) しかし、「やみはこれに打ち勝たなかった」。
2. 異端者は、「神と交わりがあると言っているが、しかもやみの中を歩んでいる」。
- (1) ヨハネが手紙の中で「もし（私たちが）……と言うなら」と言っているときは、問題を起こしていた異端の教えを否定していることが多い<sup>2</sup>。
- (2) この異端者たちは、兄弟愛を実践していなかった（2:4、9；4:20）。彼らは、光の中を歩んでいなかった。
3. もし「暗いところが少しもない」神と交わりを持っているなら、その歩みは闇の中を歩むことにはならないはずである。
4. 「光の中を歩んでいるなら」、「御父と御子イエス・キリストとの交わり」に根差した交わりを持ち続けるはずである。
- (1) 「光の中を歩む」とは、使徒たちの教えに従い、義の道を照らす光に導かれて歩むことである。
- (2) そうすれば、信者同士の愛の交わり、また神との愛の交わりを持ち続けるはず。
5. 「光の中を歩んでいるなら」、「御子イエスの血はすべての罪から私たちがきよめます」。
- (1) これは、「光の中を歩み続けるなら、御子イエスの血はすべての罪から私たちがきよめ続けます」という意味合いにもとれる。
- (2) イエス・キリストを信じた者たちは、既に「義と認められ」、神との平和を持っている（ロマ5:8-10）。
- (3) しかし、アダムから受け継いだ罪の性質（ロマ5:12）は残ったままである。
- (4) だからこそ、私たちは「御子イエスの血」によってきよめられ続ける必要がある。
6. 「光の中を歩む」ことと「きよめられる」ことのバランス
- (1) 御子イエスの血によってきよめられるためには、光の中を歩み続ける必要がある。（信者になってからの罪の赦しについては、9節で詳しく見る。）
- (2) しかし、私たちには罪の性質があるから、自力では光の中を歩むことができない。
- (3) 「私たちの良心をきよめて死んだ行いから離れさせ、生ける神に仕える者とする」のは、イエスの血である（へブ9:13-14）。
- (4) 信者の歩みは、十字架に現れた神の愛と恵みによる。
- (5) 「光の中を歩む」ことを強調しすぎると、「～しなければならない」という風にバランスを崩す（律法主義に陥る）。
- (6) しかし、「光の中を歩む」ことを軽んじると、罪を大目に見てしまう危険性がある。

---

<sup>2</sup> Glenn W. Barker, *1 John, Expositor's Bible Commentary*, vol. 12, Frank E. Gaebelin, eds. (Grand Rapids, MI: Zondervan, 1981), p. 310 ; ストット『ヨハネの手紙』46-47頁

### 3. 罪の性質の否認は偽りである(1:8-9)

1:8 もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。

1:9 もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

1. 異端者たちは、「罪はないと言う」。
  - (1) おそらく、異端者たちは「自分たちは救われたのだから、罪の性質はなくなった」と考えていたのかもしれない。もしくは、「自分たちは選ばれていたのだから、罪の性質は元々なかった」と考えていたのかもしれない。
  - (2) しかし、それは偽りである。
2. 信者の中にも罪の性質が残っている。
  - (1) コリント教会の「救われていない者のように行動する信者」<sup>3</sup> は、「肉に属している」者と呼ばれている (I コリ 3:3)。つまり、信者であっても罪を犯してしまう。
  - (2) 御言葉の光は、「たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別する」(ヘブ 4:12)。御言葉の光は私たちの罪深さまでも照らし出す。
  - (3) もし真理が内にあるなら、自分がいかに罪深い人間であるかを知るはずである。
3. 神は、罪赦された後もなお罪を犯してしまう私たちを赦してくださる。
4. 理由1：神は「真実」な方である。
  - (1) 「真実で」は、神が契約を忠実に守り、実行される方であることを意味する。
  - (2) 神は、信者の罪が赦されることを約束しておられた (エレ 31:34)<sup>4</sup>。
  - (3) 神は、その約束を忠実に守り、実行される。
5. 理由2：神は「正しい」方である。
  - (1) 「正しい」は「法を守る」という意味である。
  - (2) 罪は、「神の定め」によれば「死罪に値する」(ロマ 1:32 ; 6:23 も参照)。

<sup>3</sup> Michael G. Vanlaningham, "1 Corinthians," *The Moody Bible Commentary*, p. 1780.

<sup>4</sup> エレ 31:34 は、「イスラエルとユダの家とに」結ばれる「新しい契約」(エレ 31:31-34) の条項の一部である。新しい契約は本来神とイスラエル民族との間に結ばれたものである。しかし、聖書はユダヤ人と異邦人から成る「新しいひとりの人」(エペ 2:15) である教会もまた新しい契約と関係があることを教えている (I コリ 11:25; II コリ 3:6; ヘブ 8:6-13; 9:15; 10:15-18; 12:24)。キリストは、ユダヤ人と異邦人の「両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させられた」(エペ 2:16)。そのことは、「栽培種の枝」であるイスラエルが所有している「オリーブの木」に「野生種の枝」である異邦人が接ぎ木されたというたとえでも表現されている (ロマ 11:17-24)。これらのことから、キリストにある異邦人は、「共同相続人」としてイスラエルのものである新しい契約の祝福に与っているのだと結論づけることができる (ロマ 8:17 ; 15:27)。

- (3) しかし、私たちの罪の身代わりとして「御子イエスの血」が流された。イエスが神の怒りに対する「**なだめの供え物**」としてご自分を捧げ（Iヨハ2:2；ロマ3:25）、血を流されたことにより、「私たちの罪の代価が支払われた」<sup>5</sup>。
- (4) 十字架によって神の義が満たされたから、私たちの罪の赦しを与えられた。
6. 信じた後に罪が赦されるためには、「**自分の罪を言い表す**」必要がある。
- (1) これは、「自分の罪を言い表し続ける」と読むこともできる。
- (2) 「**言い表す**」は、罪について否定せず、（神に）言われた通り事実を認めるという意味である。
- (3) よって、ここでの「**自分の罪を言い表す**」とは、「日常生活で犯す罪を、ひとつひとつ具体的に告白」<sup>6</sup>し、それを神の御前で認めることである。
- (4) また、罪によって誰かを傷つけた場合、その相手にも「**罪を言い表す**」すべきだろう（ヤコ5:16）。神の御前で罪を認めて告白しておきながらも相手に対する告白がないのなら、ヨハネが教えている兄弟愛の実践からはほど遠い。
7. 罪は、「**暗いところが少しもない**」神とは相容れないものである。私たちは罪を犯したとき、それを神の御前で認める必要がある。
8. 同時に、この9節は、罪によって汚されてしまう神と私たちとの交わりを回復させる道を教えてくれている。

#### 4. 罪を犯したことがないという偽りの主張(1:10)

1:10 **もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません。**

1. 今度は、異端者たちは「**罪を犯したことがない**」（新共同訳）と言う。
- (1) もし罪の性質があるならば、救われた後でも「**罪を犯したことがない**」と言うことは、当然「**自分を欺いている**」ことである。
- (2) これは、神を「**偽り者**」とすることである。この言葉は、イエスが悪魔に対して使っている（ヨハ8:44）。つまり、「**罪を犯したことがない**」と言うことは、神を悪魔のような「**偽り者**」にしてしまうことなのである。
2. そのような主張をする者には、「**神のみことば**」は留まっていない。

<sup>5</sup> 中川健一『ヨハネの手紙 第一「救いの確信を得る喜び」』2016年聖書フォーラムキャンプ配布資料（ハーベスト・タイム・ミニストリーズ、2016年）5頁

<sup>6</sup> 中川『ヨハネの手紙 第一』5頁



- (1) イエスは、天の大祭司として、私たちのためにとりなして祈ってくださる（ヘブ 4:15；ロマ 8:33-34）。イエスはそのために「多くの苦しみ」を受けられた（ヘブ 5:8-9）。
- (2) この異端者のように偽ることは、イエスの受けられた苦しみを否定することである。
- (3) イエスの苦しみを否定することは、そこまでして救いの道を与えようとされた神を「偽り者」にすることであり、「神のみことば」をないがしろにしている。

## 5. 罪に対する正しい認識(2:1-2)

2:1 私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。もしだれかが罪を犯すことがあれば、私たちには、御父の前で弁護する方がいます。義なるイエス・キリストです。

2:2 この方こそ、私たちの罪のための——私たちの罪だけでなく、世全体のための——なだめの供え物です。

1. ヨハネは「私の子どもたち」という親密な呼びかけを使って、罪に対する正しい認識を教えようとしている。
2. ヨハネがこの手紙を書く第3の理由は、「あなたがたが罪を犯さないようになるため」である。
  - (1) 信者は「光」である神を信じているのだから、「光の中を歩」むべきである。
  - (2) そして、信者はイエス・キリストを信じたことで、既に「罪と死の原理」から解放されている（ロマ 8:1-2）。
  - (3) だから、本当ならば「神の子」である信者は罪とは関係ないはずだ。
  - (4) クリスマスは、「罪の性質が残っているから罪を犯す可能性がある」ということと、「神の子なのだから罪とは関係ないはずだ」ということを、両方とも現実として受け止める必要がある。
3. 信者が「たとえ罪を犯しても」（新共同訳）、イエスが私たちに弁護してくださる。
  - (1) 私たちが罪を犯したとき、サタンはその事実を使って神の御前で私たちのことを訴えている（ヨブ 1:6-12；2:1-6；ゼカ 3:1；黙 12:10）。しかし、そこから弁護してくださるのがイエスご自身である。
  - (2) イエスはあらゆる試みと苦難を通過され、神の義にとって十分な「なだめの供え物」としてご自分を犠牲にされた。
  - (3) だからこそ、義なる御父のもとで私たちに弁護することができる。
4. 「私たちの罪のための——私たちの罪だけでなく、世全体のための——なだめの供え物」

- (1) 「**なだめ**」には、「身代金の支払いによって神の怒りによる罰を避ける」という意味合いがある。
- (2) 旧約聖書では、人間の罪深さ、罪そのものの邪悪な性質が明らかにされている。ローマ人への手紙1-2章でも、パウロはそのことを強調して教えている。
- (3) そのような邪悪なものである「罪」に対して神が「怒り」を向けられるのは、神が完全にきよい方であり、義なるお方だからである。
- (4) 「神の怒り」が向けられて当然である罪の性質を持っている私たちは、自分たちではこの性質をどうすることもできない。だから、自らを「**なだめの供え物**」として身代わりに犠牲を払ってくださる救い主が必要である。
- (5) そして、「**御子イエスの血**」によって、私たちは神の怒りから救われた（ロマ5:8）。
- (6) 「**世全体のための**」とは、十字架によって全世界の罪が自動的に赦されたということではない。赦されるためにはイエスを信じる必要がある（ヨハ3:16）。人がイエスを認めず、受け入れないならば、自分のために「**なだめの供え物**」が捧げられたことを拒否していることと同じである。
- (7) 逆に言えば、イエスを否定した「世」（ヨハ1:10）に属する者でさえ、誰に対しても「**なだめの供え物**」によって神の怒りから救われる道が用意されている。事実、「世」に属していた私たち自身が、イエスを信じることによって救われた。
- (8) これこそが、福音が「良い知らせ」だということの理由である。

## まとめ

- ・ ヨハネは、(1) 信者同士が愛に根差した交わりを持つようになるため、(2) それによって喜びで満たされるようになるため、そして(3) 信者が罪を犯さないようになるためにこの手紙を書いた。
- ・ 神は光であり、神の内には闇や罪は全くない。
- ・ 私たちは(1) 救われ、(2) 光の中を歩めるようになり、(3) 罪を犯してしまった後も赦しの道が与えられており、(4) 弁護していただける。それらの土台は全て、イエス・キリストの十字架である。
- ・ 神が光であるという福音のメッセージを学び、罪に対して理解を深めることで、私たちは「罪を犯さないようになる」ことを目指す。